こころの不調における抑肝散加陳皮半夏合半夏厚朴湯の有用性

悠心身クリニック（福岡県）　中澤 武志

当施設では、漢方薬を中心に治療を行っている。漢方薬を選択することで、治療の幅がひろがり、患者との協同で状態が改善する喜びを実感できる機会が飛躍的に増す。中でも、現代の様々なこころの不調に対して『抑肝散加陳皮半夏合半夏厚朴湯』が高い処方率であり、患者からの評価も得ている。
今回は、特に印象に残っている3症例を提示する。

Keywords　抑肝散加陳皮半夏、半夏厚朴湯、こころの不調

はじめに

精神科・心療内科として漢方薬中心の治療を行うクリニックを開いて約5年半が過ぎた。それまでの30年余りはほぼ西洋医学一辺倒であったが、漢方薬を使うようになって治療の幅がひろがり、患者さんとの協同で状態が改善する喜びを実感できる機会が飛躍的に増したと実感している。

5年間での新患の数は約5,000名に上るが、直近の2年間の約2,000名のうち初診での抑肝散加陳皮半夏合半夏厚朴湯の処方率は8割2分に及んでいる。

心療内科・精神科を標榜していることもあり、当然、患者の主訴は百人百様である。ときにイライラや不安、不眠。さらに様々なストレスから自律神経を乱したことによる息苦しさや動悸、パニック、またパワハラなどによる精神被害や身内の人間関係での悩みなど枚挙にいとまがない。

これらの一筋縄ではいかないと思われる様々な問題に対して主に『クラシエ抑肝散加陳皮半夏エキス細粒（KB-83）』と『クラシエ半夏厚朴湯エキス細粒（KB-16）』を併用しているが、その7割6分の方々に「こころが楽になった」との評価を得ている。

後に、その中から印象に残る3症例を提示するが、全般的に効果の発現は数日以内で、ほとんどが数回の受診で一度、治療終結に至っている。

なお、2割弱の無効ないし処方変更を求めた症例においては、その理由として「身体が怠くなった」との訴えがほとんどである。

今回、『クラシエ抑肝散加陳皮半夏エキス細粒（KB-83）』と『クラシエ半夏厚朴湯エキス細粒（KB-16）』を併用投与し、特に印象に残っている3症例を提示する。

症例1　50代 女性

【主　訴】　不眠、憂鬱

【病歴・経過】　会社の仕事（事務職）が忙しく、人間関係もストレスが多くよく眠れていない。日々が憂鬱で時々どうしようもなく涙が出る。仕事帰りの高速道路で気がついたらとんでもない速度を出していることから自分自身を怖く感じ当院受診。受診時、うつむき加減で、時々涙を浮かべながら訴える姿から意気消沈のなかにもこころのなかに押し込めた強い怒りや不満を感じたため抑肝散加陳皮半夏7.5g/日（分2）＋半夏厚朴湯6.0g/日（分2）を2週間投与した。再診時、別人のように生き生きとしている姿があり、症状の軽減がみられた。その後も仕事を続け、車も安全運転できているようである。さらに、漢方薬の効果に感動したこともあり、娘の月経不順や月経前の不調を治してほしいと来院され、現在2人とも良好な状態で経過している。

心療内科や精神科の診療をしていると、時々やや過剰反応する患者は散見されるが、数ヵ月を経ても状態は安定した症例であった。

症例2　10代 女性

【主　訴】　引きこもり、ゲーム依存

【病歴・経過】　引きこもりやゲーム依存、浪費がみられたことから母親に連れられ、当院受診。受診時、無言、暗い顔で膝を抱えるように身を縮め上目遣いで時々こちらに視線を送る程度であったことから抑肝散加陳皮半夏7.5g/日（分2）＋半夏厚朴湯6.0g/日（分2）を2週間投与した。結果、著効を示し、再診時には1人で受診され、家族とも良好な

関係を築けていると笑顔がみられた。その後通院はないが、家族からの相談もないため、おそらく問題行動は見られていないと考える。

われわれの外来では、家族が嫌がる本人を無理やり受診させるケースはめずらしくないが、本人の協力なくして治療は成り立たない。引きこもりからゲーム依存、浪費など表面的には家族にとって許せない行動でも、その裏には本人のなかに孤独で自分を表現できない拘束された心理状態がある場合がある。複雑な人間関係などで傷つき、その苦しさを症状や問題行動で表現する思春期の子供たちがいるというケースは精神科・心療内科医であれば経験している場合も多いだろう。さらに軽度発達障害があると自己表現が難しく、身近な行為や物質に耽溺することもめずらしくない。今回、本症例のような思春期のケースにも『抑肝散加陳皮半夏合半夏厚朴湯』が著効を示した。

症例3　30代 男性

【主　訴】 突然の息苦しさ、不安感

【病歴・経過】 体育会系であり、野球推薦で会社に就職。体力に自信があり、毎日晩酌して週末は野球の試合をこなしていた。しかし、ある梅雨の午後に突然息苦しさとともに逃げ出したくなる衝動に襲われた。その後も、再発作の不安から徐々に外出をしなくなり、仕事、野球ができず、家族を残して実家に帰省したことで当院受診。処方選択として体育会系なこともあり実証タイプと捉え、症状を『気逆』とみて『苓桂朮甘湯』を基本に『桂枝加竜骨牡蛎湯』などを併用することもあると考えた。しかしながら、自分がパニックになったことを会社の同僚には知られたくないとの訴えから抑肝散加陳皮半夏7.5g/日(分2)＋半夏厚朴湯6.0g/日(分2)を2週間投与した。再診時、症状の軽減がみられた。その後、梅雨明けとともに回復し、はじめて野球仲間に自分をさらけ出せるようになり、元気になっていった。最近は、社会人野球の地区大会で優勝したとの報告をそえて日焼けした顔をたまにみせる程度であり、経過は良好である。

本症例のように不安、過呼吸、パニックの一連の症状群で受診される方は多く、その場合に漢方治療を希望されるケースも少なくなく、今回もそれにたがわなかった。

なお、今回報告した3症例において、薬剤に起因すると考えられる副作用はみられなかった。

考　察

最後に全体を通して『抑肝散加陳皮半夏合半夏厚朴湯』と現代のこころの問題について多少の考察を行っていく。

益田総子は著書のなかで『抑肝散加陳皮半夏』を称して『傷つけられた人たちの「味方」』と記している[1)]。

我慢、反省ばかりを教え込まれやすいわが国の土壌において、反論や切り返しがうまくできずに人間関係で精神的被害者となりやすい方々が激増している感がある。

また、ネット環境の普及もあり、人間関係に過度に気を遣い常に高揚した精神状態を強いられ、先行きに不安を感じやすい社会の状況がある。

『抑肝散加陳皮半夏合半夏厚朴湯』は様々な感情をため込み、身体をこわばらせ、限界になったときに何らかの症状を発現させて鎮静させる。そういう行き詰ったこころを開放し、自分の言葉で自分を表現しやすくし、不安を鎮め高揚した精神状態を鎮静させる。

こういう処方なのではないかと考えており、こころを開く『抑肝散加陳皮半夏』と不安を鎮める『半夏厚朴湯』の組み合わせを多く処方している。

さらにこの両者は相性がよく、補中益気湯を使うほど疲れ切って気虚になっていない限り、比較的選択に気を遣わずに済む処方である。

治療においては、患者の話を傾聴し、共感することをあるべきものとしたうえで、身体的な注目点として『食い縛り』や『呼吸の浅さ』『いかり肩』などを見逃さなければポイントは外さないように実感している。特に『食い縛り』は自覚しにくい重要な証である。

コロナウイルスの影響や社会情勢から『胸脇苦満』を確認する触診ができず、漢方薬の使用に二の足を踏むご同輩も多いかと察するが、こころの不調を相談された際の治療手段に西洋医学的な薬物療法に偏らない漢方薬の治療をぜひお勧めいたしたい。日々の診療に何らかのヒントにしていただければ幸いである。

〔参考文献〕
1) 益田総子:「こころ」に劇的、漢方薬. 同時代社, 1999